

大人計画公演 手塚治虫の生涯

1988年9月2日〜4日 大塚ジエルスホール

キャスト

片葉みはる…………… 治虫／アルミ／片葉見
大塚えり子…………… 治虫／勇太／異常にふけた少女
盛根さと子…………… トミ／エルザ／ラッコ
勝野雅樹…………… 老人／アーノルド／レオタード
板尾直子…………… ハル／マリア／黒木はおり
石塚紀成…………… 田浦／マグダラ／ポプ
温水洋一…………… 感染／水木／謎の男
松尾スズキ…………… 座長／鳴神／なまる研究者

スタッフ

作・演出…………… 松尾スズキ
舞台監督…………… マイケル・タム
照明…………… 佐藤啓
音響…………… 落合敏行／黒澤靖博
衣裳…………… アリババ計画
デザイン…………… 松尾スズキ
スライド…………… 森脇希利子
制作…………… 出口容子

あとがき

これは旗揚げ第二作で、大人計画としては初めて小屋を借りてやった公演ですね。大塚ジエルスホールで二時間半。かなりムタイなだけ(笑)。お客さんは三日で二百人くらいしかいなかったけど、でもこの時すでに劇評が出るんですよ。宮沢(章夫)さんが書いてくれたやつ。そんな劇団、まずないですよ。結局、旗揚げから何本か、劇団名を知られるまでに消耗していく時間っていうのがすこいもったいないじゃないですか。だから最初の頃はどうかして人に見てもらおう、インパクトだけじゃダメだけど、そこにかどうにかしてセンスを持ち込むってことはやっぱり考えてましたね。やっぱり大人計画の公演には、タイトルのインパクトがあったと思うんだよね。僕は演劇界きってのタイトル王と呼ばれてますから(笑)。

このとき手塚プロにはちゃんどことわりを入れてるからね。『手塚治虫の生涯』って公演にしたのは、そんなにすごい意味はないんですよ。全然手塚治虫の話じゃないからね。手塚治虫っていう名前の人は出てくるけど、手塚治虫ではないから。やっぱり見た感じのインパクトかな。ま、なんかおもしろいじゃないですか。実際生きてる人なのに、勝手に生涯の話を作ってしまうっていうのがね。まだ手塚治虫が生きてた頃で、次の年に亡くなったんですけどね。実は無謀にも手塚プロに出演交渉の手紙を出したら、やっぱりと断られました(笑)。この作品は、もう考えられないほど複雑ですね。どうやって考えたのか、いまだによくわからない(笑)。主人公を二人にしてるんですよ。意味もなく。一つの役を二人でやる。そのことによって着替えとかがスムーズにできたんじゃないかと思えます。背の低い女の子二人が、すごく記号の多い格好をしていて、チェックのジャケットに蝶ネクタイにベレー帽にメガネっていう。だからそんなに混乱しなかつたけど。なんかアナキーなもののに憧れてたんでしょね。ただでさえ、役者が少ないのに、一役を二人がかりでやってるから、他が逆に大変なんですけど。

この頃はカート・ヴォネガットの小説にすごいハマってましたね。彼の小説は百年くらいの単位の時間の話を組み上げて書いて、ま、小説だから可能だっというのもあるんだけど。でも小説だとわからなくてつかえた時そこで止まれるじゃないですか。映画とか芝居の時間って強制的に流れていくから、わかんなくてもあれよあれよと進んでいく訳で、そういう意味でビジュアルにするのが難しい。文字は時間をストップできるけど、ビジュアルって時間をストップできないからね。

でもそういうことを舞台でやってるとこってまずないっていう目的のつけかたをしてたんですよ。ただし、ヴォネガット風の大河ドラマをバラバラに構成し直して書くっていうのはすごい大変。バラバラにすることに意味がないとダメなわけだから、なんでバラバラにするの？って話じゃないですか。だから裏面にやってみましたね。でっかい画面に登場人物をパーツと書いて、出来事をパズルのようにそこに置いて、こことここがなるでしょ、って。

だから一本とおして何が言いたかったというよりも、全体をいっぺんにフーッと怒涛のように見て、残ったものからなにかをつむぎとっていくことですよ。考えてることを全部入れていくっていうのがその頃の主義でしたから。だから混乱しているといえ、多分に混乱してる。でも、その頃の流れるがなぜか、互いに真似したわけではないんですけど、宮沢章夫さんとかKERIAさんとかもそういう方向にいったような気がしますね。八十年代の名残をすべてぶつけていたような。

(2000年3月・談)